沖縄 交差するまなざし

遺骨の視線と声 感じて

「ガマフヤー」代表 具志堅隆松さん 上

沖縄戦の戦没者遺骨をボランティアで発掘・収集する「ガマフヤー」（沖縄言葉。住民が逃げ込んだガマ＝自然洞窟＝を掘る人という意味）代表の具志堅隆松さん(69)＝那覇市＝は、活動を始めて41年間で約400体の遺骨と向き合った。物言わぬ骨の死に至った経緯を解き明かすうち、自らは体験していない沖縄戦を実感できるようになった。遺骨は78年後のいまも、沖縄本島南部を中心に3000体近くが埋もれたままとされる。戦没者の血がしみ込んだ土を、米軍の新基地建設に使う計画が進む。同時並行して、沖縄を最前線とする「台湾有事」への備えも勢いを増す。こうした流れを見据えて警鐘を鳴らす機会が増えた具志堅さんは、戦争で命を断ち切られた人々の「声」と「目」を、時空を超えて背負う。

1月4日、沖縄県糸満市の慰霊塔「魂魄の塔」の前で「戦没者遺骨の尊厳を守る集会」が開かれた。沖縄戦体験者や遺族、平和ガイドの人たち約150人が参加し、具志堅さんもマイクを握った。「今度は私たちが戦没者になるかもしれません。沖縄を二度と戦場にさせてはなりません」。松の内も明けない新年早々、切迫感と緊迫感が漂う。

糸満市など沖縄本島南部の一帯は、沖縄戦の最終局面で元々の住民、避難してきた他地域からの住民、そこに敗走してきた日本軍と追走する米軍が入り乱れた。住民は戦闘の最前線に立たされ、逃げ惑い、命果てた。

戦後、塔の周辺の地に避難先の収容所から移動させられた真和志村（現那覇市）の住民が遺骨収集塔を組織、石を積み上げた納骨堂を完成させた。魂を慰める意味を込めて「魂魄」と命名した碑も建立した。ほとんどが身元不明の遺骨は現在、糸満市摩文仁の国立沖縄戦没者墓苑に移されたが、塔に線香を手向ける人々が後を絶たない。

その塔の近くの原野で、琉球石灰岩の採掘計画がある。山野に逃げ込んだ人々の骨片化した遺骨や、血肉がしみ込んだ可能性のある土砂が「辺野古新基地」の埋め立て工事に使われることで事態は進む。

「魂魄の塔」（左）の前で戦没者の遺骨について語る具志堅隆松さん＝沖縄県糸満市で、鶴野京子さん撮影

具志堅さんが口にした「再び戦場にしてはならない」という言葉には、沖縄戦の終結直後の次のような光景を再現させてはならない、という思いが込められている。

＜遺体は完全に白骨化しておらず、頭髪はほとんど元のまま残り、なかには皮膚の残った遺体もあった。また大人の遺体の側に、小さな遺体が二、三体重なり合った母子と思われる痛々しいものもあった＞（糸満市史編集委員会編『糸満市史』）

生き残った人々は一時、こうした亡きがらと生活を共にした。沖縄県遺族連合会記念誌部会編『終戦五十周年記念いそとせ』は、こう書き記す。

＜十手に伏せた兵士が、巻き脚絆を巻いた姿でミイラ化しているのに出会うことは日常茶飯事で、人々はそこに『動かぬ人』がいる感覚で生活を営んだ。住居のテント小屋の裏に、うつ伏せに倒れたままこと切れたと思われる遺体があっても、人々はそこで生活する他はなかった＞

＜『明日はうちの〝もの〟を持って行ってもらおう』と坊さんらしき人に、自分の住むテント小屋の裏にある遺体のことで相談する姿も見られ、遺体や遺骨の支配する世界に、生身の、生き残りが入り込んで生活している感覚であった＞

それでも、「魂魄の塔」をつくった住民がそうであったように、各地で徐々に住民によって収骨作業が進められた。遺骨は沖縄の習慣に従って開放的な納骨所や自然壕などに収められた例もあった。これを「戦没者遺骨が野ざらしにされている」とする誤った情報に基づいた風評が日本本土で広がったこともあり、1952年3月、日本政府の遺骨調査団が来沖。調査の結果、「野ざらし」を否定し、収集に取り組んだ住民への「感謝」を表明した。56年、日本政府の委託で資金援助を受けた琉球政府の遺骨収集事業も米軍に許可された。

具志堅さんが那覇市北部で生まれた54年は、遺骨収集をめぐるこうした動きがうねり始めたころである。そこには、日米両軍が死闘を繰り広げた丘が点在し、遺骨が頻繁に出土していた。空き地で遺骨はすぐに見つかったし、頭蓋骨が現れることもあった。

「遺骨の尊厳」を強調する具志堅さん＝鶴野京子さん撮影

遺骨は、単なるモノではない。具志堅さんにとって、「物言わぬ証言者」として戦争の実相を感じさせる存在である。

年少者の遺骨には、いつも胸が押しつぶされそうになる。糸満市の小さな壕でのことだ。入り口から中央付近まで砲撃などで落盤した跡があり、その下に3体の日本兵の遺骨があった。落盤をまぬがれた奥まで進むと、少年とみられる遺体がひざを抱えるようにしてうずくまっていた。そばに県立中学のボタンがあった。

沖縄戦では、中等教育の学校で学徒が軍に動員された。男子は各校とも鉄血勤皇隊の兵士として、女子はひめゆり学徒隊など各校別に編成された看護補助要員として戦場に出た。男子の場合、彼兵年齢に満たない14歳の年少者まで通信隊に送られた。

遺骨の状況から、具志堅さんは推測する。少年は戦場に送られた学徒で、負傷して壕の奥に寝かされ、日本兵が落盤して死んだ後、奥の空間でしばらく生存していたのではないか。漆黒の闇で、救助のあてもない。水はあったのだろうか。腐乱臭のなかで、どのくらいの期間、生きたのであろうか。無念であったろう。悔しくもあったろう――。

戦没者とは、自然死した人ではない。戦争に殺されたのだ。遺骨から読み取るべきは、憤りと怒りではないか。

沖縄の代表的詩人の名を冠した山之口貘賞の受賞詩人、芝憲子さん(78)＝那覇市＝の作品「骨のカチャーシー」で描かれた骨たちは、死に追い込んだ者を忘れてはいない。詩の一部を引用する。

＜ここで殺されたと証明するために　殺したやつらを忘れないために　やつらが今何をしているか知るために　簡単に拾われて　神社にまつられたりしない＞

骨になった人たちは、恐怖と絶望のなかで死を迎えたに違いない。「もっと生きたかった」。詩人の感性と同じように具志堅さんは遺骨の視線を感じ、声も聞こえるのではないか。

那覇市内の発掘現場で、具志堅さんは平和学習の小学生に遺骨を見せたことがある。怖がったり気味悪がったりしないだろうか。だが、それは杞憂に終わる。「遺骨の人の名前はわかりますか？」「年齢は？」「この骨は、これからどうなるのですか？」。質問のすべてに答え、具志堅さんは付け加えた。

「こんな現場に来ることは大人でもまず、ありません。皆さんは自分の目で見たのです。テレビや本の中での戦争ではありません。遺骨を通じて実際の沖縄戦を伝えることができます」

戦争体験者がいなくなる時はやがて来る。その時はこの子らが証言者となって、遺骨のまなざしを語り継いでほしい。具志堅さんは継承活動をもっと広げようと決意する。

詩人、芝憲子さんの「骨のカチャーシー」に共感して版画家、比嘉かなえさんが制作した木版画＝芝さん提供

◇日本軍の南部撤退　沖縄戦で日本軍は兵力の約7割を損耗しながらも司令部を首里城地下から沖縄本島南部に移して持久戦に持ち込み、「国体護持」を最後の戦争目的として日本本土での決戦を遅らせようとした。牛島満司令官が「なお残存する兵力と足腰の立つ島民とをもって、最後の一人まで、そして沖縄の島の南の涯、尺寸の土地の存する限り、戦いを続ける覚悟である」と述べたことを、戦後に生き延びた八原博通高級参謀は自著『沖縄決戦』に記録している。住民を盾にすることに、ためらいがなかったことになる。

この結果、米軍が上陸した中部13市町村の戦没者計2万9806人のうち45%の1万3401人は避難先の南部で命を落とした。また、撤退コースとなった南風原、東風平（こちんだ）、糸満の3市町で真珠湾攻撃の前年（1940年）に実施された国勢調査の人口と比較して算出した住民の戦没率は50%前後に上る（『沖縄県史・各論編6・沖縄戦』などの記録）。糸満では、いまも「一家全滅の家」が残っている。

【客員編集委員（沖縄在住）・藤原健】

＝次回は5月24日掲載